

砂川市少年の主張大会

主張全文紹介⑤



優良賞「思春期の決意」

砂川中学校3年 久米谷 壮真

僕たち中学生は、思春期の真っ只中にいます。多感な時期であり、自己中心的な考え方や行動をしてしまうこともあります。時には面倒なことやおもしろくないことがあれば、反発したり逃げたりしたりもします。僕自身も、人とコミュニケーションを取るのが苦手で、解決には躊躇してしまいます。

そんな僕をほっとさせてくれるものがあります。それは、「セルフレジ」です。最近、コンビニエンスストアやスーパーでよく目にするようになってきました。セルフレジとは、購入者自身に商品の読み取りから決済までを行わせるものです。また、セミセルフレジという店員さんが商品を読み取り、決済は購入者に行わせるという形式をとっているものもあります。

僕は、店員さんというものが大の苦手です。普通に同級生と話すことすら苦手意識があるのに、初対面で、しかもその場限りの対話を求められるため、著しく苦手意識を生み出してしまいます。

映画館で映画を鑑賞するときのことでした。ポップコーンを買うには、僕は、店員さんにサイズなどの注文を伝えなければなりません。僕には、この注文が逃げたくなるような障壁になってしまうのです。それでも中学生として覚悟を決め、注文をこなし代金を支払うことができました。達成感に包まれていた僕でしたが、僕を引き留める声で現実に戻されたのです。商品を受け取り忘れたのです。こうして店員さんとの苦手意識が膨れ上がっていったのです。この店員さんへの苦手意識がさらに緊張を生み、他にも数々の失敗を重ねてしまったのです。

そうした中、今の僕を救ってくれたものがセルフレジなのです。決まった対応を繰り返す機械には、小心者の僕でも、さほど緊張することもなく支払いを済ませることができるため、セルフレジには感謝しかありません。

ですが、決してこの選択が一番良いものだとは思っていません。この世の中でコミュニケーションが不要となる場面は、ほとんどありません。それに、コミュニケーションがうまくいくほど、相手を理解し円滑な活動も可能になるなど、その大切さも十分理解しています。

だから、コミュニケーションの苦手意識は、僕自身の個性の一つとして理解してほしいのです。理想的な個性を段階的に身に付けていく中学生ばかりではありません。時には自己中心的な言動をしたり、失敗を恐れて逃げていたりすることを繰り返すのがまさに思春期の中にいる中学生なのです。結果、周りの大人、先生、同じ中学生の仲間から厳しい指摘や要求をされることもあります。自分自身もわかっていながら反発することもあるのです。そんな指摘を受けて、反省したり逆に反発したりという矛盾を抱えていつも葛藤していくことになるのです。

でも、いずれ自身の課題を克服し、自立してかなければなりません。だからこそ、こんな僕たちをうまく見守り、付き合っていてほしいのです。

セルフレジが僕を救ってくれたように、困っている自分を支えるきっかけというものがあれば、安心できることがあります。人は多くの人と関わって生活していきます。困っている僕たち、苦手な僕たちを気にかけてくれるだけで、僕たちが変わっていくきっかけとなるのです。中学生は過干渉を嫌がる時期でもあります。けれども、諦めずに踏み込んでくれる人、陰から支えてくれる人、そしてセルフレジのように、静かに見守ってくれる人。そんな存在の大人や中学生の仲間が、思春期の僕たちに必要なのではないかと思います。

不安定な思春期を生きる僕たちは、必ず立派な大人となり、これまで受けてきた恩を返していくつもりです。

審査員の講評

昨今、増加している「セルフレジ」が利用者の便利さを目的に活用されているのに対して、自身の課題の克服という目線で述べられていました。苦手なことから目を背けずに解決していくとする気持ちが出ていて良かったです。思春期の課題に対して答えを導くことは大変難しいことですが、決意をもって大人になっていく姿がとても楽しみです。